

コリント人への手紙第二九章「与える豊かさ」

1A 前もっての用意 1-5

1B コリントの人たちへの誇り 1-4

2B 祝福の贈り物 5

2A 惜しみなく与える豊かさ 6-15

1B あふれるばかりの神の恵み 6-10

2B 感謝の実 11-15

本文

コリント人への手紙第二九章を見ていきましょう。私たちは前回に引き続き、献金についての教えを見ていっています。コリントの教会には、いろいろな問題がありましたが、そのおかげで、と言ったら変ですが、教会の信じていること、また行っていることについて、込み入った教えを認めることができます。例えば、死者の復活について、これほど詳細に教えている箇所はないと思われるのが、コリント第一 15 章にあります。御霊の賜物についても、第一の 12 章から 14 章までにあります。愛が最も優れているとして、愛の章と呼ばれているのが、その真ん中、13 章にあります。問題は多かったのですが、パウロがコリントの人たちに対する愛が満ちあふれて、そこで語っているために、教会全体にとって益になる教えが満載です。

ここ 8-9 章も、献金についての教えを詳しく見ることができます。パウロが 8-9 章で繰り返し使っている言葉が、「恵み(ギリシア語でカリス)」です。与えるところに、神の豊かな恵みが溢れていくということです。もちろん、教会の献金や、困っている人々に対する献金、宣教のための献金は、必要があります。けれども、まるで教会の運営費のようにみなしたり、何かの団体の会員費のようにみなしたら、あまりにも、神のみこころにそぐわない思いになっていると言ってよいです。私たちは、神の恵みによって、信仰を通して救われました。その恵みの豊かさが、献げること、与えるところにあふれるのです。

1A 前もっての用意 1-5

1B コリントの人たちへの誇り 1-4

¹ 聖徒たちのためのこの奉仕については、これ以上書く必要はありません。² 私はあなたがたの熱意を知り、そのことでマケドニアの人々にあなたがたのことを誇って、アカイアでは昨年準備ができていると言ったのです。あなたがたの熱心は多くの人を奮い立たせました。

パウロが、「聖徒たち」と呼んでいるのは、エルサレムにいる貧しいユダヤ人兄弟たちのことです。このことについて、これ以上書く必要はないと言っていますが、それは第一の手紙 16 章を見れば

よく分かります。パウロが、ガラテヤの諸教会でしているように、あなたがたも献金を用意しておきなさいと言って、それに対して熱心に応答していたからです。午前礼拝でお話したように、これらの準備が、他のいろいろな問題で途絶えていたというだけです。今、パウロが滞在している、マケドニアの諸教会で、コリントを含むアカイアにある諸教会の準備を聞いて、それでマケドニアの人たちが感動して、献金に対して非常に熱心になっていたのです。実は、コリントの教会の人たちこそが、彼らへの熱心を生み出しているのですから、言うまでもないことなのです。

³ 私が兄弟たちを送るのは、あなたがたについての私たちの誇りが、この点で空しくならないためであり、私が言っていたとおりに準備してもらうためです。⁴ そうでないと、もしマケドニアの人々が私と一緒に行って、準備ができていないのを見たら、あなたがたはもちろんですが、私たちも、このことを確信していただけに、恥をかくことになるでしょう。

パウロは、テトスに加えて、二人の兄弟を送ることを、8章の最後のところで話していました。この献金のプロジェクトについて、お金を取り扱うので非常に注意して管理しないとイケないということもありますし、異邦人主体の教会全体で行っていることなので、その代表者として、主にあって立てられている人たちだからです。

そして、その人たちにパウロは、コリントの教会のことを誇っていました。そして、パウロ自身がコリントを訪問する時には、マケドニアの兄弟たちも一緒に行くつもりです。そこで、もしコリントの人たちが用意できていなかったらどうなるでしょうか？単純です、恥をかきます。パウロ自身が言った時に、「えっ？献金集めるんですか？用意してませんよ。」なんて言われたらどうなるでしょうか？彼が、「では、献金しましょう」と言わねばならず、それで、献金袋を回すとかしたらどうなるでしょうか？恥ずかしいですね。

誇ることに、これはいいことです。私も、信頼する人々、確信のある教会については、他の人々から尋ねられた時、「彼らなら大丈夫。何の疑いも持たず、行っていいですよ。」と言いますね。ところが、そこで何か変なことが起こっていたら、恥ずかしくなります。確信を抱き、誇ることのできる関係を築くことは、本当に大事です。そこには、推薦状という書かれたものではなく、その人々の生きた信仰の証しがあって、その人たち自身が推薦状であります。

2B 祝福の贈り物 5

⁵ そこで私は、兄弟たちに頼んで先にそちらに行ってもらい、あなたがたが以前に約束していた祝福の贈り物を、あらかじめ用意しておいてもらうことが必要だと思いました。惜しみながらするのはなく、祝福の贈り物として用意してもらうためです。

「祝福の贈り物」とあります。神は祝福の神であられ、神の一方向的な行為、恵みによって良くする

という意味合いですね。それに対照的なのは、「惜しみながらする」ことです。直訳は、「貪欲のようではなく」というものです。「このお金は私のものなのに、どうして与えないといけないの？」と思いつながら献金したり、あるいは、「お金を与えるのだから、私たちの期待を裏切らないでね。」というような、借りのあるような献げ方をしているのであれば、それは祝福でもなく、恵みでもありません。そうならないように、予め用意をしてもらう必要があります。午前礼拝でお話したように、予め心に決めることが肝要です。そうでないと、人々に言われたからとか、そういった空気があるから、プレッシャーで献げた、ということになりかねません。

2A 惜しみなく与える豊かさ 6-15

1B あふれるばかりの神の恵み 6-10

⁶ 私が伝えたいことは、こうです。わずかにだけ蒔く者はわずかにだけ刈り入れ、豊かに蒔く者は豊かに刈り入れます。

豊かに蒔く者が豊かに刈り入れる、というのは恵みの世界です。わずかにだけ蒔くというのは、惜しんでいる世界です。あるいは、献げても理由や条件を付けて、計算して献げている姿です。農作業においてあまりにも明らかな原則が、献げることにおいても同じなのだということがあるのだ、ということですね。

聖書の中には、一貫してこの原則が働くのが約束されています。「箴 3:9-10 あなたの財産で【主】をあがめよ。あなたのすべての収穫の初物で。10 そうすれば、あなたの倉は豊かさで満たされ、あなたの石がめは新しいぶどう酒であふれる。」初物とあります。これは、順番として初めの収穫ということもありますが、最優先にするという意味合いもあります。自分に与えられた収入を、主に献げるものとして取り分けることをすれば、その収入は豊かにされる、ということです。預言者マラキにおいては、律法で定められている十分の一の献げ物を再び始めなさい、という神の勧めがあります。祭司たちは、主に対する熱心が冷めて来て、いけにえも欠陥のある牛や羊、つまり残りものを献げるということをしていました。けれども、主に立ち返って、献げることにおいても十分の一で試してみよ、と言われます。「マラ 3:10 十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしを試してみよ。——万軍の【主】は言われる——わたしがあなたがたのために天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうか。」

そもそも、神が、ご自分の民を選び、救い、祝福されるということは、ご自分の最もよいものを与えてくださることによって成り立っています。主は、イスラエルの民をご自分の長子とみなされました。「出 4:22 そのとき、あなたはファラオに言わなければならない。【主】はこう言われる。『イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。』」ご自身にとっても、最も尊いもの、愛されているものとして選ばれたのです。ですから、ご自分のすべてをかけて、この子たちを救い出し、そして、この子たちにご自身のすべてのものを受け継がせたいと願われているのです。そして、後に、ご自分の

御子をさえ、救い主、キリストとして与えることを約束されたのです。「ヨハ 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

この恵みを知った者であれば、その応答は、自分のすべてが主のものであるということを知る者たちです。すべてを与えてくださった神に対して、自分のものは自分のものにしておいて、残りを主のために使っていく、というようにはなりません。ご自分のすべて、実に独り子さえ与えてくださったと知れば、この方は自分にとって正真正銘の主ご自身であられ、自分のものはすべて主のもの、となるはずです。ですから、イスラエルの民に対しても、主がイスラエルをエジプトから救われる時に、「初子を献げなさい」と命じられています。家畜の牛や羊の初子は、主の聖別されたものとして持って行って、いけにえにするのです。人間の長子、初めに生まれた男の子も、主のものであり、この子の代わりに、羊を主に献げます。(出エ 13:1)ですから、献金においても、惜しみなく与えるということがあってこそ、神の恵みに満たされるのです。

⁷ 一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。

午前礼拝でお話ししましたが、旧約時代の律法の下にいるイスラエル人たちも、主に命じられているいけにえの多くは、自ら献げるものとして定められています。罪を犯す時には、必ず持ってこないといけませんが、他は自ら進んで献げるものです。自発的なものでなければ、献げ物の意味をなさないので。これが税金のような義務的なものでもなく、強いられたものであってはいけません。パウロなどによって圧を受けたから、だから献げるのではなく、心で決めたとおりにしなさいと勧めています。そして、喜んで与える人ですが、笑いながら、うきうきしながら与えるという意味合いの言葉です。献金とは、恵みの現れであり、そこには自分の喜びがありますし、そうした献げ物をしている者たちを、神ご自身も喜んでみておられます。

⁸ 神はあなたがたに、あらゆる恵みをあふれるばかりに与えることができになります。あなたがたが、いつもすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれるようになるためです。

ここに、なぜ、豊かに献げることによって、自分自身が豊かにされるのか、その理由が書かれています。自分のものを献げたら、そこに神は、あらゆる恵みをあふれるばかりに与えることができになるからです。パウロは、ありったけの表現で、恵みについて語っていますね。「あらゆる恵み」です。「あふれるばかりに」です。そして、「いつも」「すべてのことに」と言っています。それから、「すべての良いわざ」です、最後は「あふれる」です。

第一に、主があらゆる恵みを持っておられる方です。この方の恵みは無尽蔵です。パウロは、エ

ペソ 3 章 8 節で、エペソの人々に「3:8 すべての聖徒たちのうちで最も小さな私に、この恵みが与えられたのは、キリストの測り知れない富を福音として異邦人に宣べ伝えるためであり、」と言いました。この恵みには、キリストの測り知れない富があります。そして第二に、その恵みに、いつも、すべてのことで満ち足りることができます。ピリピ人への手紙 4 章にて、パウロは、こう言っています。「4:11-13 乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満足することを学びました。12 私は、貧しくあることも知っており、富むことも知っています。満ち足りることに飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。13 私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできるのです。」ここで大事なものは、自分の欲望を満たすようなかたちで、満ち足りるのではありません。必要をすべて満たしてくださる、ということで満ち足りるようにしていただきます。

そして第三が最も大事であり、主が恵みをもって満たしてくださる目的なのですが、「すべての良いわざにあふれるようになるため」であります。主は、良いわざを行う者たちをお用いになりたいと願われています。ご自分の義がその人たちによって広まっていくからです。ご自分の証しが人々の前で明らかにされるからです。ですから、豊かに蒔く者が豊かに刈り取るのは、その人が富むからではなく、むしろその豊かな刈り取りが、さらに良いわざへと進ませ、良いわざが広まっていくためであります。時々、この 6 節の言葉がお金持ちになる方法のようにして、貪りの心を満たすために悪用される時があります。自分が百万円ゲットできるから、今、一万円献げなさい。そうすれば、主が百倍にして返して下さる、というものです。全くそういったものではありません。

ところで、今、引用したパウロのことは、エペソ人への手紙と、ピリピ人への手紙ですが、この手紙のどちらもが、パウロが牢獄から書いていることを思い出してください。牢獄の中で、パウロは、自分はすべてに満足することができると言っています。どんな状況にあっても、苦しみの中にあっても、それでも神の恵みは尽きることはないと言っているし、また、良いわざにあふれることができると確信しているのです。ですから、これは私たちからも、始まることができるということです。神の良いわざが、私たちの間で始めれば、それを主は完成させてくださいます。パウロは、ピリピ 1 章でこう言いました。「1:6 あなたがたの間で良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださると、私は確信しています。」

⁹「彼は貧しい人々に惜しみなく分け与えた。彼の義は永遠にとどまる」と書かれているようにです。

これは、今朝の詩篇の交読文で読んだ箇所です。112 篇 9 節です。主は、霊的な豊かさで満たして下さる約束です。貧しい人に惜しみなく分け与えることによって、その義は永遠の義となって御国の中で留まります。

ユダヤ人は選びの民ですが、永遠というところまで行きませんが、それに近いことを行います。

ホロコーストの時に、自分たちの難局を助けてくれた人を、戦後になっても、尋常のない執着心をもって探し出し、報い、賞を与え、生活の保障も与えるのです。「諸国民の正義の人」ということで、日本では杉原千畝さんがいます。リトアニアの日本領事館に来た約六千人のユダヤ難民に、日本を通過する旅券を発行しました。彼は戦後、外務省のリストラで失職します。結構、生活は大変な所を通っていたようです。不幸もありました。けれども、ユダヤ人たちが必死になって探し、ついに彼を見つけたのです。それで、ずっと後に日本政府が杉原氏に謝罪し、栄誉賞を与えるに至りました。イスラエルでは、杉原家には潤沢な支給金が今でも支払われています。

そして、日本陸軍で、樋口季一郎中将も同じように、イスラエルで、ゴールデンブックという名誉の書に、名を連ねています。彼は、満州国の陸軍の指揮者になっていた時に、シベリアから逃げてきたユダヤ難民を上海にまで逃がすということを行いました。彼に対しては、戦後、ソ連が怒って彼を戦犯にし、死刑にしたがっていましたが、マッカーサー元帥が断りました。なぜなら、世界のユダヤ人の団体が、アメリカの政府にロビー活動をやって、その動きを阻止したからだと言われていました。困難な時に助けた人に対しては、永遠の恩義があるとユダヤ人たちはみなすのです。神は、同じようにして、いやそれ以上に、貧しい人々にためらうことなく分け与えたことについては、永遠にその義を覚えていてくださるのです。

¹⁰ 種蒔く人に種と食べるためのパンを与えてくださる方は、あなたがたの種を備え、増やし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます。

物質的な必要を、分け与える人々には満たしてくださいます。そして、分け与える人々の義の実が増えるようにしてくださいます。

2B 感謝の実 11-15

ここまでが、分け与える人々に対する神の恵みです。次に、その献金を受け取る人々、エルサレムやユダヤにいる聖徒たちに、この恵みが及ぶことを次に説明しています。

¹¹ あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、すべてを惜しみなく与えるようになり、それが私たちを通して神への感謝を生み出すのです。¹² なぜなら、この奉仕の務めは、聖徒たちの欠乏を満たすだけでなく、神に対する多くの感謝を通してますます豊かになるからです。

この献げ物を受け取る人々の中に、「神への感謝を生み出す」ようになります。受け取るユダヤ人の兄弟たちは、自分たちの欠乏が満たされることで、感謝しているだけではないのです。神に対する感謝になります。異邦人の兄弟たち、ありがとう、だけで終わらないのです。神ご自身に感謝します。なぜなら、「奉仕の務め」であるからです。ここの奉仕についてのギリシア語は、祭司たちの務め、主に対して献げ物をする務めの時に使われます。まさに、祭司の務めとして、主に献げら

れたものとして、彼らはみなすことになるだろうということです。

教会で行われている、一見、人間的には事務的に見えるようなことであっても、全くそんなことではなく、御霊によって神の家で仕える、霊的な祭司になっているのです。「Ⅰペテ 2:5 あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。」

¹³ この務めが証拠となって、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であり、自分たちや、すべての人に惜しみなく与えていることを理解して、神をあがめるでしょう。

パウロが、異邦人主体の教会から受け取る献金について、感謝の実が結ばれるだけでなく、「神をあがめる」ようになると、ここで言っています。かつて、異邦人コルネリウスが、ペテロの宣教によってイエス・キリストを信じたことについて、ペテロがコルネリウスの家に入ったことをユダヤ人信者たちが責めました。けれども、ペテロが順序正しく説明しました。それで、彼らは悟りました。「使 11:18 人々はこれを聞いて沈黙した。そして「それでは神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ」と言って、神をほめたたえた。」神を、異邦人のことでほめたたえました。こういった賛美の実が結ばれるということです。

その理由として二つのことを挙げています。一つは、「福音の告白に対して従順」だということです。イエス・キリストの福音を信じています、という告白に、どれほどの真実味があるのか、と、神を畏れ敬い、またイエスを信じているユダヤ人たちは思っていたことでしょう。恵みを安価なものにしていすのではないかと。しかし、神の恵みは、今まで見てきたように、貧しい人々に惜しみなく分け与えるという義まで生み出すものです。そういった行いが、福音を信じる告白の中に含まれているということです。もう一つは、「すべての人に惜しみなく与えている」ということです。異邦人であり、また見たことも、会ったこともないのに、それでも惜しみなく与えている。このことを理解して、神をあがめます。

¹⁴ そして彼らは、あなたがたのために祈るとき、あなたがたに与えられた、神のこの上なく豊かな恵みのゆえに、あなたがたを慕うようになります。

次に生まれる実は、異邦人であるあなたがたを慕うようになる、ということです。パウロは、キリストが私たちの平和であり、二つのものを一つにすると教えました(エペソ 2 章)。それが、単に言葉だけではなく、事実、具体的な恵みの働きによって確かめることができます。

ユダヤ人の兄弟たちが、コリントなどの人たちのために祈ります。これ自体、すばらしいことです。私たちが、例えばアメリカにある教会、カルバリーチャペル・コスタメサが私たちに支援をしてくださ

っていることで、私たちも彼らのために祈りますね。受け取った実は、神への感謝、神への賛美だけでなく、こうって祈りへと実が結ばれていくのです。そして彼らは、「神のこの上なく豊かな恵みのゆえに、あなたがたを慕う」ということです。ユダヤ人はユダヤ人の教会、異邦人は異邦人の教会ではなく、すべての人に与えられている神の恵みを実現している、一つの教会なのだということです。この恵みのすばらしさのゆえに、彼らがあなただがたを慕うようになりますよ、と、パウロは言っています。

¹⁵ ことばに表せないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。

パウロは、これこそ「賜物」であると言っています。恵みと賜物は密接につながっています。神の恵みが注がれて、それが賜物として現れます。それが言葉に言い表せないほどのものなのだ、ということです。恵みが惜しみない分け与えになり、そして人々が永遠の義を得て、また受け取った人々には、感謝と賛美が生まれ出て、また相手を慕う心も与えられ、互いに祈り合います。それが、教会がキリストのからだ、一つになっているからだを体験していくという恵みです。そしてもちろん、天においては、あらゆる国民が一つにされて、神とキリストをほめたたえています。(黙示 5:9-10)

どうか、この章とその前の 8 章で、パウロが教えていたことが、私たちのもかかないように。最後に、ある注解書に書いて行った、恵みによる分け与えについて教えている箇所を持って終わりたいと思います。「キリスト者が、献げることによりにためらいを感じる時、その人は自動的に、恵みによって与える領域から外れて行ってしまふ。恵みは、決して、(なぜ献げなければいけないかという)理由を求めない。恵みはただ、機会を求めているのだ。何か必要がある事を知れば、恵みの下にいるキリスト者は、それを満たすためにできることを行うのだ。」¹惜しみない献げ物、ぜひこれを覚えましょう。

¹ Wiersbe, W. W. (1996). [*The Bible exposition commentary*](#) (Vol. 1, p. 662). Victor Books. "When a Christian starts to think of excuses for not giving, he automatically moves out of the sphere of grace giving. *Grace never looks for a reason; it only looks for an opportunity.* If there is a need to be met, the grace-controlled Christian will do what he can to meet it."